

浦賀文化

平成 24 年 (2012 年) 7 月 1 日

第 30 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

文覚上人と浦賀

平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての武士・真言宗の僧。「平家物語」にも登場し、怪僧とも呼ばれる数々の伝説を残している。

西叶神社の裏手上には「文覚畑」と呼ばれている場所があり、文覚上人の草庵があった所と伝えられている。

文覚上人は、治承四年(一一八〇)、源頼朝の旗揚げに際して、源家の再興を祈願するため、京都の石清水八幡宮を浦賀の地に勧請したと言われている。そして、文治二年(一一八六)には平家が滅び、文覚上人の願いが叶ったことから「叶神社」と呼ばれるようになったという。

さて、時は平安時代の末に当たる平治年間(一一五九〜一一六〇)、宮廷では栄華の夢に酔いしれていたころの話である。都で一つの大事件が起こった。都に「袈裟御前」と呼ばれる美しい人妻がいた。夫は、渡辺渡という弓馬の誇りも高い青年武者で、その友人に遠藤武者盛遠と呼ばれる凛々しい血気さかな若者がいた。この遠藤武者盛遠こそ、のちの文覚上人その

人である。

盛遠は友人の妻である袈裟御前に、いつか深い思慕の念をいだくようになっていった。盛遠の苦悶は激しさを増し、嫉妬の念に狂わんばかりだった。

そうしたある日、たまたま母の見舞いに戻った袈裟御前に、機会を伺っていた盛遠は近づきこの三年間の思い、苦しみや悩みを切々と訴えた。盛遠の情熱に根負けした袈裟御前は夫を殺してくれと持ちかけてしまう。

そしてその夜、約束したとおり袈裟御前の夫を亡き者にするため寝床に忍びこんだ盛遠は、誤って袈裟御前を斬殺してしまう。その後、愛する人を失い、また罪の重さを懺悔した盛遠は、発心し出家をして「文覚」となる。

時は過ぎ、治承四年(一一八〇)、伊豆の国の流人頼朝が平家討伐の兵を挙げたとの報告が伝えられた。その陰には「高雄の荒法師」と呼ばれる一人の怪

僧・文覚上人の姿があった。

保元・平治の戦乱を経て、平家軍に敗北を喫した源氏の嫡流・源頼朝は、伊豆で二十年以上及ぶ流人生活を過す。時を同じくして、文覚は、後白河法皇に対し高雄山神護寺再興のため寄進を強要した罪を問われて伊豆へ流される。それは皮肉なことになり、頼朝と文覚の間に密談を重ねる機会をつくってしまうこととなり、平家打倒を後押しする状況を生み出すこととなった。

では、文覚が、なぜ怪僧と呼ばれたのか。『平家物語』によると、「文学」、「文覚斬らる」という段が、荒法師・文覚の素性を次のように描いている。

「那智に千日こもり、大峰三度、葛城二度、高野・粉河・金峰山・白山・立山・富士の嵩・伊豆・箱根・信濃戸隠・出羽羽黒、すべて日本国残る所なく、

……宮こへのぼりたりければ、およそとぶ鳥も祈り落とす程のやいばの験者(修行者)とぞ聞えし。

……文覚は天性不敵第一のあらひじりなり……」

しかし、伊豆に流されていた文覚も、やがて都に帰り、後白河天皇や頼朝からの援助を受けて神護寺の復興を実現したり、東寺や東大寺などの修造にも尽力するなどの社会事業に貢献したという。のちに後白河法皇、頼朝が亡くなると、源道親への襲撃計画に加わった嫌疑をかかれ、佐渡や対馬へ流され、最後は九州で客死したという。やがて文覚の遺骨は弟子の上覚によって都に持ち帰られ、今も神護寺の山頂に静かに眠っている。



西叶神社 例大祭

発心……菩提心を起こすこと
客死……よその土地で死ぬこと



★参考資料

「横須賀むかし話」 堀越英男・編著
「浦賀西岸叶神社誌」
「朝日 日本歴史人物事典」
「平家物語」



歴史語りい座・浦賀 三十

郷土史家 山本 詔一



●浦賀に宿屋ができた●

文化八年(一八一)三月、東浦賀村の庄八・徳田屋金七・久五郎の三名と西浦賀村の齋藤豊次郎・伊勢屋忠兵衛・倉田惣三郎三名から旅宿開業許可願いが、奉行所へ提出された。

浦賀は港町であったので、船乗りのための宿である船宿はあったが、旅人に対する宿はなく、浦賀に宿泊することになると主に東西の名主宅などが提供された。もともと一般の家に浦賀以外の村人を宿泊させるときには、名主への届け出が必要であった。

また、東海道や中山道などにある宿場であれば、近隣の村を巻き込んで人足と馬を常時一定の数用意して置くことが必須条件であったが、浦賀ではそこまでの用意はしなくてもよかつたと思われる、この旅宿許可願いは、三月中に下りた。奉行所の許可が早かつたことをみると、奉行所でも旅宿の必要性を認めていたことと思われる。

しかし、旅宿を開業するにあたって、心得には「宿は旅人だけでなく、幕府の役人な

どが出張の折の御用宿をかねること。この御用宿とするときは入念に準備をし、一般旅人を制限し、役人に迷惑をかけぬように努めること。」と宿場という本陣とまではいかないが、武士の利用を優先させることを最初に示されている。

その次は、「あたりまえのことだが、法度法令は固く守ること。なかでも賭け事は絶対にさせぬこと。」とあり、旅宿のように素性の知れぬ連中が使用する場所では、賭博が行われることが多かつたことを物語っている。

さらに、「公用で来られた武士は当然のこと、主の用事や私用であつても、武士が止宿した場合は、到着、出発のたびごとに奉行所へ届け出ることに。また、武士が出立した後には忘れ物があつたなら村役人に届け出ること。町人などの忘れ物は、宿泊者の住所が確かな場合はそこへ送つてあげなさい。宿泊者の居所がわからない場合は忘れ物があつたという届けだけでよい。」とある。これをみると幕府の役人でない武士の動向に目を光らせていたことがわかる。忘れ物に関しては、このあとに記

されている病人やけが人、さらには死亡した人への対応と同じである。

続けて「宿屋内では喧嘩口論が起らないように、もし喧嘩などで怪我人が出たときには、直ちに届け出をすること。宿泊客に病人が出た場合は、取り決められている通り大切に取扱ひ、大病であれば村役人へ知らせ、またこの先への旅が続けられそうにない場合は、患者の村へと連絡し、迎えが来るのか、送つていくのか決めなさい。」とある。旅人は個人であつても、このやりとりは村と村のものであり、費用も村の負担であつた。

最後は「飯盛り女はいけなし、猥らがましいことのないよう。火の元に用心。お尋ね者や盗賊、出どころもわからぬ何とも怪しい風体の者は留めておいて、すぐさま奉行所へ注進するように。」との通達を出して、旅宿の心構えを示した。

浦賀へ旅人が来るようになるのは、文化七年(一八一〇)に会津藩が、江戸湾警備にくふうになつてからであり、この旅宿もすばりそのタイミングであつた。

笑話一題

今まであまり振り返らなかつた横須賀の歴史に、最近とても興味湧いてきます。なぜだろう？

横須賀は軍港都市で海軍に係わるものが多く残つているので知りたい。また、当時、祖父が横須賀の若松町で「いと店」を開業しており、現在も若松町の諏訪神社の玉垣にその店の名前が刻まれています。祖父と一緒に生活していた母からよく昔の話を聞かされてきました。その母が今年二月に急に亡くなり、横須賀の歴史に興味を持ち始めましたのは、そんな思いからかも知れません。

海軍や陸軍の軍人たちが生活していた場所。歴史的なものが数多く残されている横須賀。その中の一つに、米が浜に現在も開業している料亭「小松」があります。旧横須賀鎮守府の海軍軍人たちがよく利用した海軍料亭「小松」です。私はその裏に、幼い時、両親と生活をしていて、近くを通るたびにどんな所かとても興味を持っていました。調べてみると海軍関係の有名な方々に利用され、海軍軍人の書など、日本海軍の歴史を知るための貴重な資料が今でも、数多く残されているようです。

創業者は、昔、浦賀にありました旅籠料理店「吉川屋」で働いていた山本コマツ(幼名・山本悦さん)です。独立して料亭「小松」を開業しました。

その後、海軍軍人相手の「海軍料亭」になつたそうです。そして、東郷平八郎・米内光政・山本五十六など歴代海軍提督に利用され、海軍の歴史と深い関係を持つことになりました。最近「聯合艦隊司令長官 山本五十六」という映画が上映されました。日本海軍の歴史を知ろうと興味深い映画です。

また、海軍料亭「小松物語」というめづらしい文獻にも目を通した事があります。まさしく歴史に残る建物です。是非とも歴史と料理を堪能してみたいものです。

四月には、旧横須賀鎮守府司令長官官邸(田戸台)に、足を運んでみました。海軍の歴史の深さに改めて感動しました。今後は、横須賀の古地図を探し、まだまだ残っている横須賀の歴史を掘り起こしてみたいのも楽しいかな・・・と思つています。

浦賀コミュニティセンター 講座開催のお知らせ

例年好評の「セピア色の浦賀」を、今年も開催致します。

鴨居編(6/28開催)に続き、東浦賀編(10月)・西浦賀編(11月)・吉井編(未定)を順次開催予定です。

地元在住の方に地名の由来・屋号などのお話を聞いた後、付近を散策しながら神社仏閣を訪れます。昔の浦賀を身近に感じられる内容となっております。

各回ごとに広報よこすか、浦賀 TODAY 等で募集を行います。ご興味のある方は、是非お申込みください。